

「仮面舞踏会」(下)

マリー・ボナパルト著（及川 和夫訳）

「ペスト王」「アモンティリアードの酒樽」「跳ね蛙」に見られるように、父親の乱痴氣騒ぎが罰せられることもときにはある。しかし息子の乱痴氣騒ぎが罰を受ける場合のほうがはるかに確実であり、そして残酷である。なぜなら父親は死んでいたとしても、依然支配力をふるうからである。それは何よりも人類の歴史に大いに示されているし、「赤死病の仮面舞踏会」のプロスペロ公の物語によくあらわれている¹⁰。

この物語は明らかにヴァージニアの最初の咯血という現実の衝撃がきっかけで書かれた。振り返ってみよう。その劇的な出来事が起きたのは一八四二年一月だった。そして『赤死病の仮面舞踏会』は同年五月に『グレイアムズ・マガジン』に発表された。

ポーの書いたもので、これほど鮮血の影響を受けたように見える作品はほかにない。

長いあいだ、「赤死病」が国を荒し回っていた。これほど致命的

「仮面舞踏会」(下)（及川）

で恐ろしい疫病はかつてなかった。血がこの病の化身であり徴候であった。赤い血の、身の毛のよだつ恐怖が。激しい痛みと突然の眩暈、それから全身の毛孔からおびただしい流血があり、こときれるのだった。患者は身体、とりわけ顔に真紅の染みがあらわれて病のしるしとなり、それがあらわれると仲間のいかなる助けも同情もえられなくなってしまう。発病、病の進行、死による病の終結までの全過程はほんの三十分の出来事であった。

咯血もやはり長くは続かない。それは突然起こり、「とりわけ」頭部からひとりでにまっ赤な血があらわれる。

だが皇太子プロスペロ公は明るく、恐れを知らず、機敏であった。配下の領民も半ば死に絶えると、宮廷の騎士、貴婦人のうち元気で陽気な気心の知れたもの千名を呼び集め、とある人里離れた城郭風

の僧院に逃れてしまった。この僧院は巨大かつ壮麗な建築物で、公の気まぐれで尊大な趣味の産物である。高く強固な城壁が回りを取り囲み、鉄の門がいくつかしつらえてあった……。

この門のかんぬきは内側から溶接されてしまう。

僧院には大量の食料が備えられていた。これだけの準備があったので、宮廷のものは伝染病にたいして敢然と挑戦を口にすることもできた。外の世界は勝手にすればいい。嘆いたり、くよくよ考えるのも愚かなことだ。公はありとあらゆる楽しみの仕掛けも用意した。道化もいれば、即興詩人もいた。バレエの踊り子もいれば、楽師もいた。とびきりの佳人がいてワインもあった。これらすべてのものと安全が内側に、そして外側には「赤死病」があった。

こうしてプロスペロ公は、『デカメロン』の語り手たちが邸宅に閉じこもったのと同じように僧院に立て籠もり、赤死病を締めだし、内部にその災いの決して及ばない堅牢なひとつの宇宙を造り上げたと考えた。赤死病は流血と去勢、それに死の象徴である。

そこではあの二つの大きな罰はもはや存在しない。かつて太古の人間の群れを支配する家父長が、放縦で反抗的な息子たちにモラルを押しつける手段とした罰はもう存在しないのだ。したがって、息子たちは何の束縛もなく楽しみにふけることができた。

この隔離生活も五、六ヶ月たつ頃、外の世界では疫病が最高潮にその猛威をふるっていたが、プロスペロ公は比類ないほどに壮大な仮面舞踏会を開催して千人からの仲間をもてなした。

じつに官能的な眺めであった、その仮面舞踏会。

ポーの「官能的な眺め」の着想はかなり奇妙であることがわかるだろう。ほかの作家なら、放縦なプロスペロのお祭り騒ぎに、例えば裸の女性などを何人か加えるはずである。ところが逆に、参加者は全員窮屈に仮面をかぶり仮装している。さらに見ていくと、この輝かしい舞踏会には「ワイン」が出されているが、淫らな調子はいっさい欠落している。貞節がプロスペロの宮廷を支配しているのである。プロスペロにとっても、その作者であるポーにとっても、官能は生殖器レベルとは異なる様式で表現されている。

続いて舞踏会会場になった壮麗な広間が次々と描写される。そしてまずその出だしで、ポーの考える「官能的な」雰囲気がいかに登場している。それは彼の「家具の哲学」で最大限に高められたと言えるだろう。そのような広間が「七つあった」。

宮殿の続きの間というものは多くの場合……長くまっすぐ見通せるものである……。しかし、ここでは広間は不規則に配置されていたので、一度に一部屋以上はほとんど見渡せなかった。二十ヤード、三十ヤードいくことに急な曲がり角があり、そのひとつひとつ

が新鮮な効果をあげていた。部屋の中程の左右の壁にはそれぞれ縦に細長いゴシック風の窓があり、曲がりくねった続き部屋に沿った室内の廊下に開いていた。これらの窓のガラスはステンド・グラスで色はその部屋の装飾の主調となる色に合わせてあった。例えば、東の角の部屋には青の壁掛けが掛けてあったので、その窓の色は鮮やかな青色であった。

東から西に見ていくと、部屋の色は順番に青、紫、緑、オレンジ色、白、すみれ色である。

七番目の部屋は四方を天井から壁に掛けた黒いビロード地の綴れ織りで覆い尽くされ、同素材で同じ色合いの絨毯の上に幾重にも重く折り重なっていた。だがこの部屋は唯一窓の色が室内装飾と一致していなかった。この部屋の窓ガラスは真紅、深い血の色だった。これらの七つの部屋にはどれひとつとしてランプや燭台はなかった。……だが続き部屋に続く廊下には窓の向こう側に重い三脚台があり、その上には火鉢に火が灯されていた。その光は色付きのガラスを照らし、まぶしく部屋を照らし出していた。このようにして変化に富んだ、けばけばしく夢幻的な雰囲気醸し出されていた。だが西側の黒づくめの部屋では火の明かりが血の色のガラス越しに黒い掛け物に映えて、その効果は怪奇の極みに達しており、その部屋に入った者の形相を物凄いものにかえるので、誰もあえて近寄ら

うとしなかった。

読むだけで息が詰まる描写である。換気について言えば、廊下に通じた窓があるだけだ。また照明に関して言えば、大部分濃く色付けされたガラスの窓越しに入ってくる光があるばかりである。部屋は悪夢のように次々と曲がりくねって出口なく続く。こういった部屋割りの設定が、ポーには「官能的」であると思われるのだ。

だが思い出してみれば、宮殿、城、住宅、地下室、いずれにしても、全般的にあらゆる住居は、夢や人間のさまざまな想像力の産物においては、しばしば象徴としてあらわれる。これらはすべてわれわれが元々住んでいた原初の住処、母親の身体が転移したものである。ポーのさまざまな物語では、これと同じ象徴があらわれている。特に城などに顕著だが、不吉な「アッシュャー家」ではこの象徴が明らかである。この作品でも、城壁で固めた僧院が同様の象徴であることは確実である。赤死病は罪人である父親の新たな、恐ろしい化身であるが、しかもその赤死病に脅かされたプロスペロ公は、僧院に避難して閉じこもる。しかし実際は母親の子宮に避難して閉じこもっているのである。ここでの象徴の総体は無意識の最も深く、原始的な相から派生している。そして子宮は母親の内臓としてイメージされている。「アモンティリアードの酒樽」のモントレゾールの地下室や、『アーサー・ゴードン・ピムの物語』のツアラル島のうねうねとした暗い地面の裂け目なども、この象徴とまさに同じ意味を持っている。「赤死病の仮面舞踏会」の

曲がりくねった、プロスペロの陰鬱な続きの間も同じ象徴を思わせる。これらの三つの例では、腸を示す言葉が母親の胎内を象徴的に表現している。それはたぶんすべての子供がある段階までは抱く、赤ちゃんは肛門から生まれるという考えと関係している。

私はかつてある老嬢に出会ったことがあるが、彼女の話では自分はこの性的なことにまったく無知なままで育ったので、処女を失ったとき、血がでたのは肛門からなのか、陰部からなのかまったくわからなかったという。

同じように、プロスペロの七番目の、一番西側の部屋は肛門を思わせる黒で覆われているが、窓ガラスからの血のような微かな光が溢れている。それは母親の月経を思わせるとともに、親の喀血とも関連がある。すべては臆という枠の中にある。というのも、子供の想像力にとってそれが唯一の存在だからである。場所の描写とは何よりも、夢や空想、神話における場合と同じく、人体を置き換えたものにほかならない。それは原始的な想像力の比喩の場合と同様である¹²。

アーサー・ゴードン・ピムは二度死の危険を免れている。最初は船倉に隠れ、二度目は山の洞窟に身を潜めた。プロスペロ公の僧院は、その点ではモントレゾールの地下室に似ており、子宮にほかならないが、安全性では劣る。ある象徴がこのことを浮かれ騒ぐ人々へ陰鬱に警告している。というのも、西側の赤と黒の広間には、

西側の壁のところに巨大な黒檀の時計があった。その振り子は鈍

く重い単調な音をたてて揺れていた。分針が文字盤を回ると、時計の真鍮製の肺腑から時を告げる音が聞こえてきた。その音は大きな澄んで深い音で大層音楽的ではあったが、とても独特で誇張した調子を持っていたので、一時間たつたびに演奏中の楽団員は時おり緊張して演奏の手を止めて、この音に聞き耳をたてた。そのためワルツを踊っていた人々は旋回をやめ、陽気な参会者全員のあいだに短い動揺が走った。

時が告げられると人々は微笑みながら見つめ合い、今度時を打つても怯えた気分にならないようにと誓い合った。だが、

六〇分たち(すなわち三六〇〇秒の時間が流れたということだが)、また時計の時を告げる音が聞こえてくると、またしても人々は動揺し、おののき、物思いに耽った。

この巨大で葬式を思わせる黒檀の時計の振り子がたてる、チクタクという「鈍く重い単調な」音は奇妙にも別なものを連想させる。それは「ものいう心臓」の「低く鈍い、そしてせわしない」「ちようど時計が木綿の切れに包まれたときにたてるような音」である。ポーの物語では時計が重要で、そしていつも同じ役目を果たす。このテーマはかなり後になるが「陥穽と振り子」を論じるときに詳述する。その作品には土牢が登場するが、それは確実に保護してくれる子宮ではやは

りない。ここでは「赤死病の仮面舞踏会」の時計が生き物のようであり、心臓のように脈打つ振り子と「真鍮製の肺腑」を備えていることを観察するだけで満足しよう。「肺腑」という言葉が使われているが、これはたんなる暗喩ではない。というのもここでは時計が大鎌をもった時の翁の役目をはたしているからである。民衆の想像力では、それは万物の父であるクロノスの化身であり、「陥穽と振り子」にも不気味に登場する。というわけで、この作品で息子の分身である宮廷人たちは、異端審問の犠牲者のように大鎌のもとで無防備に身をすくめる必要はないにしても、真鍮製の肺腑の声と真鍮の鼓動に震え慄くのである。それは父親の心臓の単なるチクタク鳴る音であると同時に、「呼吸喪失」の場合と同じく父親の男性的能力の象徴なのである。母親の体内である僧院のなかで、息子を去勢し殺す原初的な存在である父親から安全な避難所にいると彼らは信じ込んでいた。だが、母親の体内のなかの最深部の避難所といえども、復讐をもくろむ恐るべき父親の存在から逃れることはできないことがわかった。

こういったことがあったが、陽気で壮大な宴であった。……この盛大な宴にさいして七つの部屋の移動可能な装飾の大部分を指揮したのは公爵であった。仮装の性格は彼の趣味によるものだった。例外なくそれはグロテスクなものだった。ギラギラとけばけばしく、刺激と空想に富んでいた。のちに『エルナニ』（訳註・フランス・ロマン派の始まりとなったヴィクトル・ユーゴーの劇作品）以降に

見られるようになったものがふんだんにあった。

だが、ポーとユーゴーの「けばけばしさ」は違うはずである。

ちぐはぐな手足に衣装をつけたアラベスク模様の人物もいれば、狂人の着衣のような錯乱した奇想も見られた。美しいものも、気まぐれなものも、奇怪なものも、恐ろしいものもふんだんにあった。また嫌悪感をかき立てるようなものも少なからずあった。

実に「官能的な」光景ではないか、この仮面舞踏会は。

その間も黒檀の時計は時を打ち続ける。「すると一瞬、時計の音以外はすべて沈黙してしまう」。夜は次第に更けていく、「だが仮装したものは誰も……一番西側の部屋には入ろうとしない」。だが時計が時を打つあいだ、他の部屋では宴会の騒ぎが渦くように繰り広げられていた。「そしてついに時計は真夜中を告げる鐘を鳴らし始めた」。突然全員が動くのをやめ静まった。というのも「……今度は時計の鐘が十二回打たれねばならない。その分だけ思慮深くものを考える時間があった」。

また偶然にも、最後の鐘の音の反響が完全に消え去るまでに、多くの人はそれまで誰もとくに注目していなかった仮装した人物の存在に気づいた。この新たに登場した人物の噂がささやかれてあたり

に伝わり、ついには全会衆からザワザワとした眩きの声が聞こえた。その声は最初「怪しからん」とか「驚いた」という声であったが、次第に恐怖と戦慄と嫌悪をあらわす声にかわった。

「この夜の仮面舞踏会はほとんど無礼講に近いものであった」が、その場の全員にとって、

この新参者の衣装や風采には機知もなければ慎みもないという気が配が濃厚であった。この人物は背が高く頑丈な身体つきで、頭のとっぺんからつま先まで死に装束に身を包んでいた。素顔を覆う仮面は実に巧みに硬直した死体の表情に似せてあり、どんなに仔細に吟味しても偽物とはとうてい考えられないほどであった。まあ、ここまではなら浮かれた参会者たちは、納得はしなくとも我慢ぐらいはしたかもしれない。だが、この死に装束に身を包んだ者は、あろうことか赤死病の典型的な特徴までそこにつけ加えていた。その衣装は血で塗られていたのである。また広い額から顔中にも身の毛のよだつような真っ赤な血の色が飛び散っていた。

プロスペロ公はこの幽霊じみた姿に目を止めた。(それはゆっくりと厳かに、まるで本当はその役目を長引かせたいとでもいうように、ワルツを踊る人々のあいだを行ったり来たりしていた)。公は最初、恐怖または不快のせいで身体を一瞬ビクッと震わせた。だが次の瞬間には公の眉間は激しい怒りのせいで真っ赤になった。

「あんなことをやっているのは誰だ」。公は近くに立っていた宮廷の者にかすれ声で聞いた。「あんな忌まわしい悪ふざけでわれわれを侮辱しているのは誰だ。あいつをひつとらえて仮面を剥いでやれ。夜明けに城壁から吊るし首になる奴の正体がわかるようにな」。

青ざめた廷臣たちと公が立っていたのは東側の青の部屋であった。

だが、誰もあえて彼の命令に従わない。仮面をかぶった男は「慎重で悠然とした足どりで彼に近づき」、そして「公から一ヤードも離れていないところまでやってきた」。そして、

多くの人々がその場に居合わせたのが、まるで全員ひとつの衝動に支配されたかのように部屋の中央から壁際へと後ずさりしていた。彼は誰にも邪魔されることなく、最初から際立っていた堂々と落ちついた足どりで青の間から紫の間へ、さらに緑の間へと進んでいた。

そして、「彼を捕らえよう」という決然たる行動は起こらなかった。これに対して、公は、

自分が一瞬とはいえ臆病風に吹かれたのを恥じ、また激怒して、猛然と六つの部屋を駆け抜けた。だが、誰一人としてそのあとを追う者はいなかった。・・・彼は抜き身の短剣を手にし、引き返した。

つあったその男から三、四フィートのところまで猛烈な速さで近づいた。すると男は突然振り向いて、追ってきた公と直に顔を合わせた。鋭い叫び声があり、短剣は黒い絨毯のうえに光りながら落ちた。次の瞬間、そこへプロスペロ公が倒れて息絶えた。

そこでついに人々はその部屋に押し寄せて、

その男を捕らえる。彼は黒檀の時計の陰に身動きもせずに直立している。人々は男の死に装束と死体のような仮面を乱暴にぞんざいに扱うが、その背後には手触りできる実体が不在なのを知ると、言いようもない恐怖に捕らわれ息を飲んだ。

いまや赤死病がそこに存在していることは誰にも否定できなかった。彼は夜闇に乗じた盗人のようにやってきた。人々はひとり、またひとりと浮かれ騒いでいた広間を血で染めて倒れた。・・・浮かれ狂った最後のものの命がこと切れると、黒檀の時計も止まった。三脚台の炎も消え、暗黒と退廃と赤死病がすべてのものを無限に支配した。

* * *

「群衆の人」での父親は罪を犯した人物として描かれていた。「ものいう心臓」と「跳ね蛙」では父親は正当な罰を受けた。ところが「赤死病の仮面舞踏会」では父親は少なからず正当な復讐をするものへ復

帰する。

この死をあたりに振りまく仮装した人物は、父親以外の存在ではありえない。息子であるプロスペロ公は罪を犯した。伝染病の蔓延によって自分の臣民の多くが死んでいるのもかまわず、彼は千人の家臣とともに僧院へ閉じこもり享樂的な生活をする。そこはあらゆる危険から安全な避難所であると信じた彼は、浮かれ騒ぐばかりである。この乱痴氣騒ぎには色好みの要素が欠けているように見えるが、僧院の象徴の文章全体に、女性、すなわち母親を所有するというモチーフが刻印されている。このモチーフは余りにもありありと作品全体に拡散して書かれているがゆえに見逃されてしまう。それはちょうど地図であまりに大きな字がページいっぱいに書かれていると、大陸や国の名前を見逃してしまうのと同じである。

女性である母親が凌辱される様子は舞踏会の細部の描写にさえ見いだされる。性欲の要素が混入していないにしても、ここでの娯楽は「狂人の着衣のような奇想、・・・奇怪なもの恐ろしいものがふんだんにあった。また嫌悪感をかき立てるようなものも少なからずあった」。プロスペロ公の想像力がすべてを支配しているわけだが、それは典型的にサディスティックな性質を持っている。彼の豪奢な仮面舞踏会は、大人の性器性欲を知らぬため、恐怖だけを快楽の対象にしている「危険児童」の夢想に似ている。母親である僧院は凌辱されるが、その手法はサディスティックで排泄に関するものである。それは不吉な広間の連なりや、顔をしかめた仮面舞踏参加者によってうまく暗示されて

いる。

オイデップスの罪は二つの面から完全に遂行されたようにイメージされている。まず息子が母親を凌辱する。この点で父親は排除され、殺害される。「これらすべての楽しみが内側にあり・・・」、「外側には赤死病があった」。すなわち赤死病とは殺害すると同時に殺害される父親である。赤死病は人を殺す。ちょうど群衆の人や『モルグ街の殺人』のオランウータン、黒猫の飼い主がそうするように。またジョン・アランがフランシスを殺し、デイヴィッド・ポー、または誰も知らない愛人X氏が結核のエリザベスを殺したように。この罪のため、正当にも父親は死ぬ。今度は息子が父親を殺すのだ。それにはライヴァルとしてではなく復讐者としての意味もある。両親の役割を逆転すれば同じようなことになるが、オレステスは父親アガメムノンの復讐をするため、父を殺した殺人犯である母親クリュタイムネストラを殺す。だが、赤死病が僧院へ再登場するように、母親の化身である復讐の女神たちが息子を罰しに戻ってくる。いずれにしても、オイデップスの父親が復讐のために戻ってくるというのは人類の永遠のテーマである。ドン・ジュアンを地獄に連れて行くために指令官の石像が戻ってくる場面がそうである。またエホヴァはベルシャツアルが宴を開いているあいだに壁に「メネ・テケル・ウパルシン」という文字を記し、「カルデア人の王ベルシャツアルはその夜殺害された」¹⁴。

ここで『フォリオ・クラブ物語』に収められた寓話「影」¹⁵を思い出してみてもよいかも知れない。その物語でもやはり疫病がはやってい

るときに友人たちが宴会の席に集う。

その年は恐怖に満ちた年で、・・・疫病の黒い翼が・・・あたり一面を覆った。プロトレマイスという名も知られぬ町のとある貴族の館の広間にわれら七人は集まり、夜キオス島産の赤ワインのフラスコを傾けていた。重苦しい気分の圧迫を内心感じていたが、・・・われわれは談笑し、それなりに楽しくやっていた。だが紫色のワインは血の色を思わせた。というのも、その部屋にはもうひとりの人間がいたからだ。それはゾイラスという若者で、死んで死に装束に身を包み、横たわっていた。それはその場所の守り神であり、また悪魔でもあった・・・。

この死者は七人の人間を見ているような気がする。その目は「死神は疫病の炎を半分消したにすぎない」。この暗い物語の話者はオイノス(ワインという意味)というギリシア人だが、死者の目が自分を見ていると考え、無理に歌い出す。

すると、なんと歌声を発している彼の黒い衣装から、暗いはっきりしない影があらわれた。

その影は部屋を動き回って、静止した。それは、

真鍮のドアの表面に全貌を明らかにした・・・そのドアは若者ゾイラスの死体の足元にあった・・・。

すると、この影は話を始め、カローンの平原からどうやって戻って来たかを物語る。それを聞いて、酒を飲んでゐた七人は震えながら立ち上がる。というのも、

その影の声は特定の誰かの声ではなく、多くの人間の声だった。・・・そして、多くの亡くなった友人たちのよく憶えている、馴染みの口調で耳にかすかに聞こえてきた。

幾重にも聞こえた影の声には、王族の声以外のものも含まれていたかも知れない。それ以上に、この声はポーが三歳になるまでの幼年期の数多くの「父親」をアレゴリカルに置き換えた無意識の記憶をあらわしているのかも知れない。ゾイラスという若者はプロスベロと同じく、不品行のせいで父親の幽霊に殺された罰当たりな息子である。ポーが「影」を書いたとき、この不品行ゆえに息子が罰を受けるというテーマは、奇妙な形で人生の現実によって甦ってきた。というのも、彼の父デイヴィッドと母エリザベスを奪ったのと同じ肺結核で兄ヘンリーが一八三一年に亡くなるのを目にしたばかりだったからだ。したがって、飲んだくれ詩人であるオイノス・エドガーは、飲んだくれで病死したゾイラス・ヘンリーの姿を見て震え上がり、父の影が行使しうる

報復に恐れおののいて、ヘンリーに自己投影をしたのかも知れない。

父親の影が復讐しようとするのは、あらゆる父親の復讐の神話すべてに言えるが、オイデッパスの罪の総体に対してである。それは現実には犯したか、象徴的に犯したかは別にして、息子の犯した父親殺しと近親相姦の二重の罪である。ドン・ジュアンは現実には指令官を殺し、母親の代理であるその娘を現実には奪う。ベルシャツアルは神殿の聖なる杯を略奪し、冒流するために宴会でその盃を使って酒を飲む。「杯」(カップ、ゴブレットの類)は普遍的に女性象徴であり、ここでは母親を象徴する。なぜなら、この杯は父親像を称揚した存在である、神エホヴァにのみ奉獻されたものだからである。プロスベロは母親を象徴する僧院へ逃げ込み、自分が安全にそこを所有していると信じ込んだ。これらすべての人物、ドン・ジュアン、ベルシャツアル、プロスベロ、さらにゾイラスは、何よりも「酒を飲んで」乱痴気騒ぎのさなかに倒れた。彼らの犯した罪は口腔で母親を凌辱した罪である。「黒猫」の飲んだくれの主人公の罪もそれであった。奇怪にもパンチ・ボールの玉座に君臨しているベスト王も同様である。また「跳ね蛙」で嫌がる道化師に自分と同じように飲酒することを強制する王もそうだし、「アモンテリリアードの酒樽」のフォルトウナートも同断である。物語によれば、プロスベロの僧院での楽しみのなかには「ワインがあった」とされているし、ブトレマイスでのゾイラスとオイノス(象徴的な名前である)の宴会の中心にもワインがある。またベルシャツアルは神の杯でワインを飲み、ドン・ジュアンは冒流的に指令官に宴に加っ

て一緒にワインを飲もうと招待する。これはなかでも最高の皮肉であり、自分が父親と母親を共有するのを見に来いと誘っているのと象徴的に等しい行為である。なぜなら、すでに繰り返し指摘してきたことだが、ワイン、アルコール、飲酒の嗜好は、どれほど後天的に獲得可能な同性愛の色合いが強いとしても、なにより第一に赤ん坊に与えられる最初の現実の飲み物に由来する。それは母親が赤ん坊の滋養のために自らの胸から与える母乳である。さらに「影」のワインは「血のような紫色」であり、ツラル島の川は血管のようである。これは母乳期以前の段階への、夢想によるさらなる退行の痕跡ではないかと問うこともできるだろう。おそらく時には血液が母乳のかわりになることはありうる。というのも、出生前の段階で母体の胎盤で胎児に栄養を与えるのは母乳ではなく、血液だからである…。

とはいえ、プロスペロ公の僧院への避難は母体幻想であり、これは前性器期の様式における母親との近親相姦に相当する。仮面の復讐する男に表象された、追放された父親も、まさに同じ解釈をしている。それゆえ、父親は息子が避難している場所にやってきて罰をくだすのである。父親は息子の罪に対して、息子に二重の罰を与える。明らかに、息子は父親殺しに対する報復で殺され、近親相姦に対する報復で去勢される。なぜなら、プロスペロ公は仮面の男を刺そうと短剣を振り上げると、男は突然振り返る。

鋭い叫び声があがり、短剣は黒い絨毯のうえに光りながら落ちた。

次の瞬間、そこへプロスペロ公が倒れて息絶えた。

死は芸術的に現実の形式で表現することができる。しかし去勢の場合はそうではない。だがここでは、象徴的な形式で短剣が去勢を表現しているのは間違いない。この短剣は『モルグ街の殺人』の刺刀、「黒猫」の斧の相当する。ただ単に父親に睨まれただけで息子は短剣を落としてしまい、息子は武器を失う。復讐する父親の亡霊である、赤死病の仮面をした男が自ら復讐に現れ、罪のある息子を罰している。これは「ものいう心臓」や「黒猫」よりもいっそう直接的な懲罰といえよう。それらの作品では、父親の代理に警察が罰を下していた。この作品には、公的な正義を行なう警官は不要である。監獄、法廷や絞首台も不要である。ただ振り返りさえすればよいのである。そうすれば、優れて息子の化身である皇太子ばかりでなく、その分身である廷臣全員が倒れて死ぬのである。「影」では父親が無限に分身するが、ここでは息子のほうが無限に分身している。「人々はひとり、またひとり」と浮かれ騒いでいた広間を血で染めて倒れた」。

だがそのあと、復讐の作業がいったん成就してしまうと、父親のサドⅡ男根的な活動自体が終息してしまう。「浮かれ狂った最後のものの命がごと切れると、黒檀の時計も止まった」。西側の広間では、父親を象徴する太陽が地上で実際に「休止」してしまう。この復讐の物語は、ある種の精神分裂症に見られる一種の「終末幻想」で幕を閉じる。だが、この幻想では血生臭い去勢する殺人者にして、無限の恐ろ

しい神である父親が虚ろな世界でただひとり永遠に君臨する。「暗黒と退廃と赤死病がすべてのものを無限に支配した」。復讐するはわれにあり……こう主はのたまわれた¹⁶。

注

10 『赤死病の仮面舞踏会』『グレイアムズ・マガジン』一八四二年五月号。『プロードウェイ・ジャーナル』二巻二号。

11 『家具の哲学』『バートンズ・ジェントルマンス・マガジン』一八四十年五月号。『プロードウェイ・ジャーナル』一巻十八号。

12 ほとんど疑問の余地のないことだが、地理を理解したり記憶することに心理的抑制が見られる学童は、幼年期の去勢コンプレックスを解決できていないのである。また女性に地理が苦手なことが多い理由は、明らかに「男根喪失」を無念に思っているからである。女性は人体の配置を「直視」したくないのである。

13 'Rebel'「浮かれ騒ぐ」という英語の言葉は'rebel'「反抗する」に由来するが、これはまったく理由がないわけではない。例えば息子が道徳的良心を教え込んだ父親の権威に対する反抗が、「浮かれ騒ぐ」という観念には事実上原初から含意されている。

14 『旧約聖書』『ダニエル書』五章三〇節。

15 『影―ある寓話』『サザン・リテラリー・メッセンジャー』一八三五年九月号、『プロードウェイ・ジャーナル』一八四十年一巻二二号。

16 『旧約聖書』『申命記』三三章三五節、『新約聖書』『ローマ人への書簡』二二章一九節。

〔解説〕 前号に続く、マリイ・ボナパルト著『エドガー・ポー―生涯と作品』第三章「仮面舞踏会」の後半部である。前半の部分では「アモンテリアーダの酒樽」「跳ね蛙」「ペスト王」などの作品に、息子が父親に復讐するモチーフが読み取られていた。この後半では「赤死病の仮面舞踏会」を中心に、奇妙な短篇「影」を参照しながら、反対に父親が息子を懲罰する物語を読み取って

いる。「アモンテリアーダの酒樽」の奇怪な地下納骨堂の酒蔵と同様に、プロスペロ公が赤死病の災禍を逃れて閉じこもる僧院の奇怪な室内配置に、ボナパルトはポーの母体回帰の願望を嗅ぎつける。しかしこれは精神分析学の功績と言うよりも、ポーの後期ロマン派から象徴主義に発展する文学のあり方が、逆に精神分析の無意識の読解を準備していると言えるだろう。部屋は細長く配置され、各部屋は照明などで色分けされている。おまけに一番西側の部屋は黒で統一され、時間を表象する大時計が時を告げている。西洋では日没との類推から、西は常に死の国の方角と見なされており、時計が究極的に表象するのも死である。ここでは伝統的象徴と独創的な象徴が幾重にも折り重なって意味の迷路を築き上げている。

しかも、ボナパルトは指摘していないが、この作品の主人公の名前はプロスペロである。これはシェイクスピアの『テンペスト』の仇敵を魔術で翻弄する魔法使い、プロスペロであるとともに、「栄える（=to prosper）」との連想から、息子の快楽原理が全面的に暗喩と化した空間といえるだろう。しかし、それにもかかわらず一見するとエロティックな要素が欠如している点を、ボナパルトは逆に風景全体がエロティックな隠喩になっていると指摘している。幼児期の体感的な母親像へ固着した、この歪んだ形の性のあり方がポーの文学的地勢学を決定している。それは一見放埒なようでありながら、成熟した性的要素が不在で、どこか後ろ

めたい屈折を含んでいる。それは父親が束の間に外出していると
きの子供同士が行なう馬鹿騒ぎのようなもので、始めから罪悪
感に満ちており、父親の帰宅の瞬間に終了する。屋敷の外部には
赤死病、屋敷の内部には黒檀の大神計という、内外から父親的表
象に挟み撃ちされたプロスペロの宴会は、徹頭徹尾この構図に貫
かれている。

今回の部分の読解で最も洞察力に満ちているのは、父親の視線
に去勢恐怖を読み取っている場面であろう。異形の赤死病の仮装
者が本物であると知るだけで、プロスペロは武器の短剣を落とし
て叫び、息絶える。あくまでも父親の不在という条件で獲得した
息子の性的優位ではあるが、それは所詮未熟なもの(『短剣』に
過ぎなかった。従って、その優位性は父親の存在を突きつけるだ
けで崩壊する態のものであった。また前回の「跳ね蛙」の王と廷
臣に父親像の無限の分身を見たように、今回は「赤死病の仮面舞
踏会」のプロスペロと廷臣に息子の無限分身が読み取られている。
このすべてを父親と息子の物語に強引(過ぎるほど)に収斂させ
てしまうボナパルトの力技が、この批評を一種古典的なレベルま
で昇華して、強力な読みの磁場を形成している

前号と同じく、底本には *Edgar Poe, Sa vie son œuvre, Étude analytique* (Paris: Presse Universitaires de France, 1958) を使った英訳 *The Life and Works of Edgar Allan Poe: A Psycho-Analytic Interpretation*, trans. John Rodker

(London: Imago, 1949) を参照した。